

平成 26 年 12 月 22 日

岐阜市立女子短期大学

学長 竹森 正孝 様

外部評価報告書

平成 24—25 年度自己評価報告書に基づき、11 月 5 日現地調査を行いました。当日、学長、副学長、図書館長、事務局長から全体の概要、各学科長からは学科の方針や現状について報告を受けました。当日、およびその後の外部評価委員の意見交換を経て、以下のよう

基準 1 (理念・目的)

女子に対する幅広く深い教養及び総合的な判断力の養成などを教育目標に掲げており、女子短期大学としてふさわしいものとなっている。教育目標はホームページにも記載されており、分かりやすく学外に向けて公表されている点は評価できる。これは学生便覧にも記載され、学内における目的の周知が図られている。

なお、学生便覧は適切な情報を得やすく、使い勝手の良い構成・レイアウトになっており、学生の立場を考慮した冊子になっている点にも好感が持てた。

基準 2 (教育研究組織)

各学科の主要科目には専任教員が配置され、責任ある教育活動を実施する体制になっている。また、カリキュラム改編にあたっては時間をかけて議論し、学内の諸機関でも充分吟味されるなど、的確な手続きに従って進められている点は評価に値する。

基準 3 (教員・教員組織)

男女比や年齢構成のバランスは問題ないと考えられる。公募による教員採用を実施している点についても、広く人材を求めており、評価できる。また、教員の昇任に際しては研究業績審査に限定せず、教育業績や学務への寄与を重視するなど適切な審査が行われていることがうかがえる。

外部評価委員会における学科長の聞き取りからは、教員の熱意が感じ取れた。学生への怠りない目配りなど、教育活動が充分に行われていることは評価の高い点である。

学生による授業評価については、パソコンから直接入力するなど、個人を特定できないシステムになっており、非常に有効だと感じた。一部の学科で行われている「卒業時満足度調査」や「卒業生と語る会」を全学的に実施することによって、全学的な課題を発見できる可能性がある。ぜひ実現してもらいたい。なお、委員の中には、卒業後 1、2 年ほどの OG に聞く「卒業生満足度調査」に替えてはどうかという意見もあった。社会人となった卒

業生が客観的に大学を見るのにふさわしい時期かもしれないという提言である。参考にしていきたい。

基準 4（教育内容・方法・成果）

各学科に適した科目構成となっている。学生の選択の幅は少ないが、それは学科の教育目標に沿ったカリキュラムが構築されているゆえであり、授業科目の内容が学科でしっかり確認し合えていることが感じられる。

特に評価に値するのは「教養演習」、および情報処理能力と外国語能力を重視している点である。「教養演習」は高校から短大の学びへの移行期をつなぐのに有効であるし、情報や外国語も学生の自主的な学びを誘発する重要なアイテムである。学生が在学中に一定以上の力をつけていることがうかがえ、成果が出ていることが感じられた。ただし、情報教育を見学した際、ペースについてゆけない学生が散見された。実習助手を配置するなど、学生の能力に配慮した授業進行を求めたい。

食物栄養学科では管理栄養士に必要な知識を先行的に学べるようなカリキュラム編成となっていること、生活デザイン学科ではインターンシップを通してより実践的な能力を身に付けられるようになってきていること、英語英文学科では休暇中の自主ゼミナールにも明らかなように、教員のゼミへの熱心な取り組みが見られること、国際文化学科ではアジアとの交流に力を注いでいることなど、評価できる点は多い。

二重担任制をとっている点は評価できる。それが有効に機能したせいであるかどうか即断できないものの、きめ細かい指導により資格取得・キャリア教育・進路相談において優れた成果を挙げているようである。また、再試験に向けた個別指導を施すなど、目標達成のための指導が行われている点、年度当初から教員のオフィスアワーを案内し、メールアドレスをシラバスに掲載するなど、きめ細かい配慮が成されている点は評価できる。

基準 5（学生の受け入れ）

アドミッションポリシーが明確に定められており、志願倍率も適正である。水準の確保ができている点はおおいに評価できる。定員充足率も満足のゆくものだが、充足率の高い学科は退学者が多いという関連が見られるので、今後も不断の努力をお願いしたい。ただし、学生相談体制が整えられ、退学者を出さないための組織的なきめ細かい対応がなされている点は評価できる。

AO入試や推薦入試の合格者に対する入学前教育を行っている生活デザイン学科の試みは評価できる。今後は他学科も何らかの形で導入してはどうだろうか。

基準 6（学生支援）

利用率の高さからは健康相談やカウンセリングなど、学生の心身両面に亘るケアの制

度が整えられていることがうかがえる。しかし、一方でメンタル面に不安のある学生が多いということでもある。今後は全学的に状況把握に努め、組織的対応をはかられたい。

進路支援は充実しており、進路決定率も高い。就職に際し、四大卒生に比べて全く遜色のない学生が出ているという評価は、教育目標が達成されていることを示唆している。また、教職員の企業訪問など地道な努力の成果とも言えよう。編入希望者も含め、学生の希望進路を確保できていることは評価できる。

経済的支援については授業料減免制度のさらなる充実が求められる。平成 25 年度からは拡充したということであるが、具体的数値が示されておらず、いっそうの努力を期待したい。

課外活動については学生支援担当者の指導が不可欠である。人事異動のある職員がフォローしにくい部分については専任教員がノウハウを蓄積し、核となる学生を育ててゆく必要がある。

基準 7（教育研究等環境）

大変静かで、落ち着いて学習できる環境である。ゴミが落ちておらず、施設が丁寧に使用されていると感じる。また、施設見学の際、学生が挨拶をするなど学生の資質の高さを実感した。大学施設はバリアフリー化され障がい者の対応が可能となっており、面積も十分な広さを確保している点、30 人規模の小さな教室にも前後に高低差があり、教員の表情がよく見え、話も聞き取りやすい点など、学習環境は良好である。また、授業時間以外でもパソコンを利用できるなど、学生の教育環境が整備されている点は評価できる。

附属図書館は、教員のお薦め図書コーナーやビブリオバトルなど、学生の本への興味関心を高める取組みがなされており、委員全員が高評価をつけた。ビブリオバトルについては県内の大学では先駆的試みであり、他の大学にも呼び掛けるなどイニシアチブをとれば、大学 PR には格好のコンテンツである。ぜひ今後も継続し、さらに発展させることを期待する。

しかし、利用状況について、平成 24 年度に下降傾向が顕著である点は少々気になる。一方で、学外者の利用は順調に増加しており、地域貢献の意味では評価できる。また、内部は若干暗いという印象を持った委員もおり、見学時には学生の利用がそれほど見られなかったので、使い勝手については学生からヒアリングしたいとも感じた。

基準 8（社会連携・社会貢献）

一般向けの公開講座の実施や、地域の高等学校・産業・他大学と連携してさまざまな事業に取り組んでおり、大学の有する知的資源等を地域社会に提供している点は評価できる。ただし、市民の興味関心との関連もあって、事業が特定の学科に偏ってしまう傾向はあるようだ。また、施設の市民開放にしろ、公開講座の開催にしろ、市民を誘導する交通手段

の確保が難しいという課題もあり、認知度を高める努力を続けてもらいたい。

岐阜の地域性をいかし、企業や専門高校とのコラボレーションをさらに進めるなど、地域から岐阜女子短期大学生を鍛えてもらうことを期待したい。また、岐阜市の施設・設備の案内役、外国人のおもてなし役など、学生が岐阜市の顔として活躍する機会を設け、さらに存在意義が出る可能性を追求されたい。

地域の名門女子短大として、地域に有為な人材を輩出する学校であってほしいという声、「岐女短」ブランドを継承する公立四年制女子大を期待する委員の声もあった。

基準 9（管理運営・財務）

事業計画・予算・決算内容について岐阜市議会への報告と議決を要すること、事務職員の定数削減問題、また、異動による業務引継等の困難を抱えながらも、それらを努力で克服している様子が見えてきた。正規職員の割合が低い点は気になる点ではあるが、嘱託職員に専門職意識・大学への帰属意識があれば運営はできるであろう。しかし、正規職員が担う方が望ましい部署（例えば保健室、図書館など）もあり、嘱託の常態化は懸念される。コスト削減と教育環境の確保を両立するのは厳しい課題であるが、教員・職員は大学運営・学生支援の要であることを常に意識し、工夫を重ねていただきたい。また、SDの重要性が求められている時代であるからこそ、職員研修については市役所内研修にとどまらず、大学独自の研修を定期的実施することが必要であろう。

教員への研究交付金については、実績枠、奨励枠による配分など独自の方法をとっていることがうかがえる。効率的な予算執行と必要不可欠な分野への重点配分という意味から実施されているものと判断できるが、基礎研究など可視化が困難な分野、人文系など数量化の困難な分野についての配慮については課題が残る。

基準 10（内部質保証）

継続的に自己点検・評価を行い、また、外部評価も受けていることから、質の保証についての取り組みは評価できる。ただし、客観性を担保するための工夫については今後も努力を継続してもらいたい。積極的な情報公開に取り組んでいる点は評価できるが、今回の外部評価を反映させ、さらなる大学の質の向上を図っていただきたい。

短大としての充実策とともに、四大化という選択肢についても検討を続けるという、将来構想委員会の姿勢におおいに期待したい。

講評（委員長まとめ）

全体として大変好印象を持った。特に先生方の熱意を強く感じた。また、図書館職員の意欲もみてとれた。施設設備以上に感銘を受けたのはその点である。建物はきちんと維持管理されていると思われるが、デザインの斬新さが本当に使い勝手の良さに繋がっているのか、教職員、学生から率直な意見を聴きたかった。

地元の委員諸氏は「安心して学生を預けられる」「質素堅実」など岐女短ブランドを維持し、キャリア教育に力を注いでいただきたいという意向が強かった。資格取得支援等熱心な教育方針に納得しつつも、学生がキャンパスライフを味わう余裕がないのではと懸念され、四大化を望む声が多かったことも付け加えておく。

科目配置は良く練られており、教養演習や基本科目の必修など、カリキュラム・ポリシーに沿ったものになっている。ディプロマ・ポリシーどおり総合力を身につけた学生を送り出すのにふさわしいと感じた。また、シラバスや学生便覧が大変見やすく、親切な作り方になっている点はぜひ見ならいたい部分であった。特にオフィスアワー、研究室アドレス、学外研修日の明示など、学生にとって必要な情報を年度当初から開示している点はおおいに参考になった。こういった点のみならず、資格取得支援や編入学指導等にも先生方の情熱を強く感じた。それが例えば栄養士免許資格取得率の高さや退学率の低さに結びついているのだろう。数値的にはそう類推されるが、今後は加えて卒業生満足度調査等、生の声を含めた詳細な分析を実施、継続していただきたい。

FD活動報告やアンケート結果、教員の研究費配分等の資料を拝読していないので、そうした部分を含めた総合評価は避けるが、先述したように学生の意見を聴取しなかったというのが素直な感想である。また、職員組織の実態が見えにくく、保健室や学生相談室等、せっかくの施設設備が生かし切れていないようにも感じた。市との調整が必要なことからあるが、授業料減免枠の拡大等、今後は経済面での学生支援強化を強く望みたい。

岐阜市立女子短期大学外部評価委員	委員長	三重短期大学学生部長	竹添 敦子
		岐阜県立岐阜商業高等学校校長	服部 哲明
		岐阜県環境生活部長	宗宮 正典
		ぎふ農業協同組合総務部長	上谷 幸正
		岐阜新聞編集局局長待遇編集員	春日井一朗